

# 遠洋

水産研究所ニュース  
昭和55年1月

No. 36

## — ◆ 目 次 ◆ —

海洋牧場候補種「サクラマス」 .....	1
大西洋クロマグロの研究会から .....	3
クロニカ .....	6
刊行物ニュース .....	10
人事のうごき .....	12
それでも地球は動いている (編集後記) .....	12

### 海洋牧場候補種「サクラマス」

サクラマスはアイヌ語で Sak-ipe「夏の魚」と呼ばれ、北海道では6～7月頃川にのぼる。本州では4～5月頃溯上し、「春の魚」である。最近でこそ日本系のサケ・マスと言えば、秋に溯上するシロザケのイメージが強すぎるが、元来、日本列島には春を彩る「鱒」があり、秋を賑わす「鮭」があった。それ故に、「鮭」と「鱒」である。日本人の生活に「鮭」と「鱒」が如何に深く結びついていたかは、遺跡や古文書が示している。「鮭」と「鱒」は縄文時代の昔から、季節になると、間違いなく集落の川にやって来る準家畜的動物であった。

「鮭」は東北、北海道で秋の味覚を代表するシロザケ(サケ)であり、「鱒」は裏日本から東北、北海道に溯上するサクラマスである。表日本にはサクラマスと近縁のピワマスがあり、かつては淀川などにも大量の溯上を見た(ピワマスと降海性アマゴの分類学的関係が論議されているが、ここでは従来の呼称に従う)。したがって、「鱒」は本州の全ての地方に土着の魚であった。

現在、シロザケは人工ふ化放流技術の向上によって5万トン以上の資源が生産されるに至った。しかし、サクラマスは生活史の特異性から、ふ化放流の技術的な難しさがあり、日本の漁獲量は3～4,000トンに低迷している。このため、最近では、「マス」と言えば、北洋漁業

などから大量に持ち込まれる安価なカラフトマスを連想する人が多いが、漁業者間ではサクラマスを「本鱒」、「真鱒」と称し、サクラマスに「鱒」の榮譽を与えている。

鮭と鱒は氷河時代から日本の風土に適応しており、生活史も異なり、生態も異なる。両者は日本列島やそれを取り巻く海洋の生産力を上手に分け合っている。すなわち、日本系のシロザケは北太平洋の亜寒帯域を東はアラスカ海湾まで、北はベーリング海北部まで利用しているが、日本系のサクラマスは日本列島近くとオホーツク海南部を利用するのみで、遠くへは回避しない。日本列島近くでは両者の分布域が重なるが、降海後しばらくの間、沿岸域で重なるのみである。両魚種は共に河川の上中流で産卵する。しかし、シロザケは湧水域に産卵床を造り、サクラマスは河川水の良く河床に浸透する淵周辺の砂礫地帯に産卵床を造る。シロザケの稚魚は離床後、直ちに降海するが、サクラマス稚魚は1年間河川に留まり、外敵に出会っても十分逃げうる大きさになって降海する。両種の稚魚は河川の限定された生産力を競合しない事によって、種としての繁栄を拡大したと考えられる。

サケ・マスは繁殖地を外敵の少ない溪流に求め、成育地を豊富な餌を有する海洋に求めた事によって、特異な繁栄を続けてきた。彼等の往復する河川の途中や、産卵し、子孫を育てる溪流等における近年の人間活動の無秩序な展開は彼等の繁栄を大きく阻害しているが、このような被害は彼等の進化のスケジュールになかった事であ

ろう。サクラマスはサケ・マスの中でも河川への依存度が強いだけに、受ける影響も深刻である。近年のサクラマス資源の低下は河川環境の悪化と乱獲による。戦後しばらくは溯上親魚も豊富であったが、海面漁業の発達や地域開発の発展と反比例して溯上親魚は数分の1に減少した。工場排水、都市廃水による水質、底質の汚染、ダムによる溯上路、降海路の遮断、取水による水位の低下など、水が文明社会を支える資源として大量に利用され始めた時、サクラマスの生存は急激に脅かされる事となった。特に、本州地域の河川はかつての姿と似つかないものに変貌した。

このような河川環境の悪化は日本だけでなく、先進国の各地でほぼ同時期に起った地球規模の現象であった。ロンドン児に釣りの楽しみと味覚を提供し続けてきた大西洋ザケ(生活史や生態がサクラマスと良く似ている)は、テムズ川の汚染によって絶滅に瀕した。アメリカのサケ・マス大生産河川であるコロンビア川は、無数のダムによって溯上路が分断された。しかし、これらの国では、一方的な河川環境の悪化に対する反省も強く、テムズ川では再び鮭の姿が見られるようになった事が世界的なニュースとなった。コロンビア川ではダムによる被害を軽減、回復するため、ふ化場や魚道の建設を手始めに、サケ・マスの生物学を見直すための研究投資が益々強化されている。

サクラマスの資源低下のもうひとつの要因は乱獲であった。海面漁業の発達は歴史的に経験しなかった漁獲強度に達しており、沖合域や沿岸域に縄が隙間なく張り巡らされている。先取りされて少なくなった溯上魚に対し、河川での密漁も後を絶たない。小さい堰ができ、その下に溯上魚がしばらくでも留まると、厭でも密漁を呼ぶ。更に、幼魚に対する徹底した漁獲圧力は日本の特異現象である。ヤマメ(サクラマスの幼魚及び陸封型)釣りは今や国民的レクリエーションとなり、自動車の普及や道路の整備により、かつては人跡未踏の渓谷であった地域にまで容易に踏み込めるようになった。多くの河川で川が空になるまで釣り人の訪問が続く。

サクラマスの生活は河川に深く依存しているが故に、人間の干渉を受け易い場所にあり、彼等が種として獲得した繁栄力を十分に発揮しえない状態に陥った。そのため、北海道や本州の一部の河川では保護水面を設定し、繁殖保護や漁獲、釣りの禁止を行うようになりつつある。サクラマスの再生産は人工的技術によって再生産効率を高めたり、生活史のどの段階かをスキップさせたりしても、親魚と降海幼魚の2つの時点における量的確保がなければ円滑に回転しない。

サクラマスの資源培養は必要な親魚数を確保する事から始まり、その親魚を利用し、天然或いは人工的に最大限の降海幼魚を海に送り出す事によって豊かな収穫が約束される。河川での幼魚に対する釣りも、成長に伴う過剰分の間引きである限りは必ずしも降海幼魚数の減少につながらないが、適切な範囲である事が望ましい。

サクラマスを取り巻く環境の上記のような状況から、日本でのサクラマス資源培養には2つの方向からのアプローチが必要であろう。1つはサクラマスの必要とする環境を出来るだけ維持、保護し、改変を必要とする時は出来るだけその被害を少なくする処置を講じ、必要なら河川の生産力を高めたり、幼魚の越冬場を造成したりしながら、天然再生産力を最大限に発揮させる方向である。もう一つは、環境改変の障害が部分処置では補い切れない場合、或いはもっと積極的にサクラマスの生活史や特性を人間側の都合のいいものに改変するために、再生産の一部や全部を代行する方法である。前者は天然再生産の援助であり、後者は人工再生産技術である。この両者の上手な組み合わせがサクラマス資源の健全な培養技術であろう。清冽な川、豊かな水生昆虫などサクラマスの欲する環境は人類にも好ましいものであり、サクラマスの収穫も天然再生産を可能な限り援助し、利用する方法で行う事が望ましい。しかし、人類の要求は多様であり、流域河川環境の改変を必要とする。その時、損なわれるサクラマス側の不利益を具体的に把握し、その被害を軽減、解消するための方法論の開発が必要である。

これまで、日本のサケ・マス増殖研究はシロザケ一本槍であった。シロザケの増殖研究もシロザケの本質的研究が十分伴って来たとは言えないけれども、一応、目標とする生産量はあげうようになった。これからはサケ・マスの多様性を拡大する研究に目を向ける時であろう。20gで放流すれば、黙っていても翌年には2kgで回帰するサクラマスのような資源はそうざらにはないし、20gの幼魚を大量に生産するFieldは我々の身のまわりに横たわっている。これまで、サクラマスの資源培養はサケ・マス関係者が熱望していたながら、技術的困難性が目先にちらつき、シロザケのように手っ取り早い方法論が見当つかず、研究者も、また行政官も意欲を削がれ勝ちであった。シロザケの資源培養技術も一応の量的水準を生産しうようになったが、その過程では多くの基本的問題に目をつぶってきたように思える。この辺で、より大きな生産増を目指すためにも、じっくりと腰をすえた取り組みが必要であろう。サクラマスの資源培養は研究者も、行政も、社会も目先の成果を急ぐのみでは成功しない。その事は過去の経過が実証済みである。海水



馴致技術やスマルト（降海幼魚）化技術など種苗の大量生産技術に係る研究に努力する反面、サクラマスの生物学的特性をじっくり解きほぐす研究にそれ以上の精力を注ぐ必要がある。

シロザケの人工増殖は変貌する日本列島の中で、溪流からの離脱によって成功した。溯上魚は下流域で一括捕獲される事によって密漁監視が容易になった。溯上魚は魚道のない堰堤でいたずらにジャンプする必要もなくなった。飼育水は湧水を離れ、ポンプで昼夜地下水を汲み上げるようになった。ふ化した稚魚は放流限界ギリギリまでコンクリート池で飼育されるようになった。このような変化は如何にも日本的な上手な方法であったが、このような適応によって100年後の繁栄基盤が磐石に構築されたとも感じにくい。沿岸漁民の心は依然として荒んだままだし、再生産のために、どんな品質の親魚をどれだけ確保すべきかなど考えない。上中流域住民からはシロザケに対する共同財産意識が消滅した。見返りがなくなった結果である。河川を治め、清流を維持した倫理と相互監視体制の崩壊である。

しかし、サクラマスの資源培養には親魚が越冬し、幼魚が成長し、冬場を生きながらえる溪流が必要である。親魚は春の溯上から秋の産卵期まで洩に潜み、海洋時代に貯えたエネルギーのみで生命を維持し、卵巣を成熟させる。幼魚は洩頭や岩蔭に陣取り、水生昆虫や空中昆虫を捕食する。洩尻に群がった半落ちこぼれ群はナワバリ占有者の死をうめる予備軍である。水温の下る冬場を乗り切るには川岸の凹みや倒木の蔭に潜まねばならない。サクラマス再生産環境の維持は地域住民の意識と利害にかかっており、それらの意識は河川からの見返りによって支えられる。サクラマスの資源培養研究は清流を願望する心に戻ってスタートしたい。（待鳥精治）

## 大西洋クロマグロの研究会から

### はしがき

9月の3日から8日まで、スペインの Santander で上記の workshop は開かれた。この研究会は昭和53年11月の ICCAT 年次会議での勧告を受けて開催されたもので、これまで関係漁業国が独自の漁獲統計や生物学的情報に基づいてやってきた資源評価等を共通のデータベースにのせるための作業が主要な目的となっている。このような研究会をもつことは、国別研究にありがちな共通性の弱さを解決するという意味で有意義なことであるが、同時に大西洋クロマグロの資源研究が資源管理に比べて比較のおくれていることを示すものでもある。

ICCAT のなかでクロマグロが重点種となっている経緯については、すでに当ニュースで幾人かが触れているので省くことにする。現在本種については、漁獲サイズ規制と漁獲死亡係数の規制を実施している。さらに日本としては国内的な自主規制を行なっている。

### 討議の概観

Santander はビスケー湾に面したスペイン北海岸線の中央あたりにある。ここに海洋研究所 (Instituto Español de Oceanografía) があってその一室が会場になっていた。議長の顔写真が地元新聞に掲載されるなどで会議はにぎにぎしく始まることになった。参加国は7ヶ国、西側からアメリカ、カナダ、東側からフランス、イタリア、スペイン、ポルトガルといづれもクロマグロ沿岸国でそれに日本が加わり、事務局を入れて総勢15～20名の割にまとまりのよい規模であった。

#### (i) 漁業のレビュー

各国が準備したドキュメントに沿って、それぞれ自国の漁業について一通りの説明をやり討論に入った。どこの国でもそうであるように、沿岸漁業には漁業の種類が多く、少なくとも3～4種をかき合っているところばかりである。したがって漁業の記述も複雑であり、漁獲統計整備の困難な様子をよくうかがうことができた。その点わが国の大西洋のクロマグロははえなわ漁業だけであるから、記載は割に簡単である。今回特に個人的に興味をもったのは、地中海におけるクロマグロ漁業の実態であったが、イタリアやフランスの研究者の説明は貴重なものであった。少し残念だったのは、古いクロマグロ漁業の伝統をもつリビア、モロッコ、トルコさらには北欧のノルウェーなどからの参加がみられなかったことである。クロマグロ特有の卓越年級の発生状況を、永年の漁業の歴史から知る手がかりがあるかどうかを探りたかったが、そこにはいたらなかった。

#### (ii) クロマグロの生態と資源のパラメータ

この項については新しい研究結果を持ち寄った訳ではなく、これまでの成果をレビューするにとどまった。

クロマグロの産卵場については、メキシコ湾と地中海西部が主要なものであることについて意見は一致した。この他にリビア沿岸とか黒海にも産卵を示唆する情報があるといわれ、後者についてはいくつかの関連論文もあるが、両海域とも未だ調査すべき余地があるという結論になった。産卵に関連して、最小成熟年齢がかなり話題となった。細かいところを別にすると、東西大西洋を通じてクロマグロはおよそ4～5才から成熟産卵が始まるというのが大方の見解のようであった。5才から10才位までのものをクロマグロの場合中型魚と呼んでいるが、

上の議論から推すと中型魚の大部分は産卵親魚ということになる。大西洋のクロマグロ漁業ではどうゆう訳か中型魚の漁獲が非常に少なく、したがって生物学的情報もきわめて貧弱である。現存の漁業は、4〜5才以下の小型魚を獲るまき網、竿づり、ひきなわ等と10才以上の大型魚を対象とする定置、スポーツ漁、はえなわ漁業等に分かれている。つまり中型魚は現存の漁業にはあまり曝されていないことになる。クロマグロは自然状態では10才位で biomass が最大になるとされているが、これに漁業が加わるからその年令はいくらか低くなり、恐らく中型魚の biomass が一番大きいと思われる。大西洋における本種の fecundity を考える上で、中型魚をどう評価するかは非常に重要なことであると常々考えていたので、成熟年令に関する議論は興味深いものがあつた。

成長および体長・体重から年令換算への共通の key を作ることも今度の workshop の主要な作業の1つであつた。勿論1本の key で過去および将来の漁獲物の年令組成を推定することについては、問題があることもわかるが ICCAT のような場ではその必要性の方もよくわかるような気がする。大西洋のクロマグロについては、実に多くの成長式が求められていてどれが妥当かなどと決めることは至難のわざであろう。そのためかどうかよくわからなかつたが、共通の age-length key を作るには無理があるということになり、その代り各国の研究者は最もよいと思われる成長式を選んで使用するとともに、年令組成ではなく体長(体重)組成を統計資料として報告することになった。但しこの合意は、共通の age-length key を作ろうとした背景を何も解決した訳ではないから、ひき続き討議されるだろう。

自然死亡率、漁獲死亡率についても簡単なレビューがあつた。標識試験により北西大西洋の小型魚に対する漁獲死亡係数は、1960-1975年は0.1~0.6と報告された。又同じく小型魚の自然死亡係数は年間0.2~0.3と推定されている。ジブラルタル近海の定置漁業に関する研究から、11~14才魚について自然死亡係数は0.18、漁獲死亡係数は0.51という結果がえられている。漁獲死亡率の方はともかく、自然死亡の方は何となく国際標準自然死亡係数に近づいている感じがしないでもなかつた。

生物関係の討議のなかで最大の関心事は資源構造であつたろうと思われる。即ち、大西洋(地中海を含めて)のクロマグロ資源は1個か或は2個かということが従来からの最大の関心事であつたのだが、一方では多くの出席者は討議の成果をそれほど期待していなかつたのも事実であつたろう。資源構造とか系統群の識別の問題がどんなものであるかこゝでは改めて述べる必要はないと思

う。クロマグロについてこれまでにわかっていることを要約してみると、①、前述のように地理的に非常に離れた2箇所に産卵場がある。即ち異なつた場所で発生したクロマグロがいる。②、標識試験の結果から、東→西、西→東の移動があることがわかっている、の2つが重要なところである。こゝ1, 2年 ICCAT における勧告は東西別の資源管理という方向へむきつゝある。東西間の交流はあるにしてもその程度は小さいか年によって不規則であるといわれるが、確かな根拠があるわけではない。したがって現在の勧告は、資源構造はわからないにしても東西別管理が資源保護の立場から有利であろうとされ、東西別管理をやるといっても今の management measures が大きく変わることを意味しない、という何とも歯切れのわるい状況にある。因みに、クロマグロよりずっと単一ストックの可能性のある他のマグロ類は全て東西或は南北別の資源評価をやっているが、本種だけが一本である。このような訳で、この研究会でも新しい事実はえられなかつたという簡単な結論になつてしまった。

### (iii) 漁獲量・努力量統計の整備

地中海を中心とする漁業について特に統計の不備が指摘された。しかし漁業の実情を聞くとも無理もないところも理解できたし、これが大西洋ではなく、太平洋のクロマグロだったら日本も地中海諸国と全く同じ立場にたゝされるだろうと思つて複雑な気持だつた。それでも、漁獲量、努力量、生物統計について国別、漁法別、時空間別に測定単位、sampling の大きさ等を記した available data の表を作成することができたことは大きな収穫であつた。

この種の統計の話になると、違反操業船の問題、輸入統計の扱い方、他国 flag による漁獲の問題等生々しい議論がでてくることになる。これとは別に、努力量統計に関連して、漁獲努力量は果して漁獲死亡率を反映するかどうか、さらに CPUE は資源量の指標になるかど



サンタンデルの魚市場





主婦による網修理

うか、といった議論があった。これは主に ICES (Aberdeen, 1978) における結論を基調にした議論のようであったが、大部分の研究者がクロマグロについても CPUE を資源量の指標とすることに疑問を持っていた。このことは今後のわが国のこの分野における研究の必要性を痛感させるものであった。

#### (iv) そ の 他

以上が議題に沿ったおまかな内容であるが、その中で印象的だった話がある。イタリアだったかフランスだったか思い出せないが、まき網漁業のやり方である。ある船が群を発見してそれをまいた時、近くにいた2番船がそれを見つけてその船にタッチするとその船は2番船に分け前を出すことになる。それを見つけた3番船がかけ寄って2番船にタッチすると2番船は3番船に分け前を出すことになっているそうである。どこまで続くのかは聞けなかったが、大袈裟な話し振りから、まいた魚が網から逃げだしていくのはそっちのけで、お互いに船べりをぶっつけ合いながら分け前のことを大声で話し合っている様子が目の当りに浮ぶようで面白かった。だがしかし、これは真にユニークな方法のように思える。確かにこれでは努力量や CPUE の計算はやゝこしく、漁獲統計は不備だといわれるかもしれないが、そこには独特で伝統的な漁業秩序がある。だがしかし、この方式は我が方のマグロ漁業では有効に育たないような気がした。

研究会の出席者は、或は ICES でおなじみの RODRIGUEZ-RODA 博士のようなキャリアの持ち主から去年大学を卒業したばかりの研究者まで様々である。

残念ながら、フランス、スペイン語国には通訳つきの会であったから、言葉のハンディはどうしようもなく、もどかしい会でもあった。

#### 土地の印象

Santander は ICCAT 事務局次長の三宅さんの話によると、一番スペインらしくないところだそうである。私には比較する材料が何もないので、そう思うより仕方がなかった。Santander までは、その東側にある Bilbao から車で約3時間かけていくことになった。2輛編成のディーゼルカーが走るローカル線は、木の枝が窓をなでるようなところもあってなかなか趣があった。広大な緑の平野にはいたるところに家畜用のとうもろこしが植えてあり、農村的な風景であったが、Bilbao には大きな造船所があって工業地帯が同居している感じであった。汽車は川沿いに上っているが、川の水が茶色に濁っていて泡だっている。どこかで嗅いだようなにおいだと思っていたら、やはりしばらくすると製紙工場があってそこからのたれ流しだった。

スペインの食べ物の話しになるとよく海産物が多いことを聞かされるのだが、さすがに多様であった。オリーブ油とか酢をたっぷり使ったものが多い。私は食べ物はこのでなければだめだというバックボーンが全くないので、色々楽しむことができた。

研究会の会場は港のすぐ近くであって、時々スペインの竿づり船が出入りするのをみかけた。クロマグロ標識放流のための竿づり操業をフィルムでみせてもらったが、日本の竿づりとはずいぶん異なっていて、竿から10m位の糸がついている。撒水をしながらかきを投げるところは同じだが、魚がかると糸をたぐって引き揚げていた。竿づりか曳きなわよくわからない漁法だが、あまり能率の良い方法とも思えないし、一般漁船も同じことをやっているのだろうか。

めったに行けるようなところでもないと思って、あまりやったことのないカメラを持っていった。その中から2枚、一つは魚市場のせりの状況、もう一つは市場のわきで主婦たちが網の修理をしているところである。

#### あ と が き

11月5日から20日まで ICCAT の会議が開かれた。久米、鈴木および私の3人がそれぞれのパートの議長やラポーターを担当することになっていた。上述したクロマグロ研究会の場合もそうだが、私は、ドキュメント作成はとも角、出席までを心づもりしていたわけではなく、少々他人まかせの気分であった。しかし、急きよ出席が決まり、気持の準備が不十分のまま出発することになった。このため本稿の執筆にまで後遺症を及ぼしたきらいがないでもない。御容赦を乞う次第である。

(新宮千臣)

## ク ロ ニ カ

10. 1 国内留学 浮魚資源部 依田技師 (北海道中央水試) (～12.15) : 北海道沿岸のクロマグロについて、生殖腺の成熟状態を考察するための技術的方法の研修を行った。  
養殖研 鈴木技官研究打合せのため来所。
10. 2 54年度農林水産省監督者養成研修 八王子 森事務官 (～20)。  
県漁連講演会 山口 長崎技官 (～4) : 管理型漁業への移行について講演。
10. 3 IOC 国内委員会及び WESTPAC 作業委員会 東京 山中(郎)部長 : 文部省にて、11月に開かれる総会や、特に WESTPAC の推進及びその事務局の所在地等について討議。  
GSK 西日本底魚部会 清水 関係各水研、及び開発センターなどから 14 名来所 (～4) : 底魚資源量の推定をめぐる諸問題に関するシンポジウムを中心に、活発な論議が行われた。
10. 4 おっとせい資源調査の実施と乗船教育の効果的な実施方策についての研究指導 函館 吉田技官 (～9) : 水産高校の実習船を用船するため、乗船中の実習生の役割を打合せた。
10. 5 水産庁資源課 今村班長外 1 名、国際課 菊地橋岡班長外 1 名 INPFC 年次会議及びサケ、マス関係準備打合せのため来所 (～6)。
10. 8 技会場所長会議 東京 福田所長 (～9)。
10. 9 ICCAT 年次会議対策打ち合せ 東京 久米技官
10. 11 おっとせい委託飼育打合せ並びに飼育場所の視察 沼津 三津シーパラダイス 水戸企連室長、池田部長、吉田技官、桜井事務官。
10. 12 アクチバブル・トレーサーの応用研究 沼津 加藤技官 : 県栽培漁業センターで実験中の希土類元素投与のマダイ標本の採集。
10. 15 海洋生産力委員会 (科学技術庁) 東京 長崎技官 (～16) : 日本近海の漁獲量からみた漁業生産量とその内わけについて、浮魚、底魚に分け検討した。なお、外洋性回遊魚についても取りまとめを行なった。
10. 16 サケ系群研修会 新潟 岡崎技官 (～17) : 日水研からの依頼に基づき、サケ別群研究の一環として「酵素の多型によるサケ系群識別の現段階」について講義し、関連問題を協議。
- CSK/WESTPAC 作業委員会 東京 山中(郎)部長 : 文部省にて第 4 回 CSK シンポジウム議事録及び投稿報文の最終審査を行い、1980年 3 月末までに印刷発刊の方針を決定。
10. 17 第26回 INPFC 生物学調査常設小委員会 (非溯河性魚種分科会 : ベーリング海パネル及び北太平洋パネル) 東京 池田部長 (～11.2)、岡田、山口、佐々木、若林各技官 (～28) : 本年より改組された各パネルでの討論の結果、ベーリング・アリューシャン海域の主要な底魚類の資源状態に関する日・米両国科学者の見解はかなり良く一致した北東太平洋海域では若齢ギンダラの豊度が近年高まっており、資源状態は近い将来現在よりも良くなるという点で 3 国の科学者の見解は一致した。非溯河性魚種分科会では、資源評価のための調査の設計 (交互追尾操業による Vulnerability の推定はカニ分科会と共催) 及びアリューシャン海盆上のスケトウダラと大陸棚上の魚群との関係が話題として討論された。更に、東部ベーリング海で実施した日・米共同底魚類資源調査に関連した作業部会を 1980 年春 東京で開催すること、ギンダラの生物学と資源評価及び調査の設計 (1979年継続) などの話題が次回のテーマとして生物学常設小委員会へ勧告された。  
INPFC 会議の事前検討 東京 佐野部長、竹下技官。
10. 18 INPFC 会議の準備 東京 高木技官 (～19)。  
アルゼンチン沖底魚資源調査結果の取りまとめ 東京 長崎技官。  
日・加協同マツイカ資源調査 カナダ沖水域 魚住技官 (～12.3) : 我が国の商業トロール船を用いた試験操業により、漁期終了後の大型残存イカ群の漁場からの逸散 (産卵場への移動) 機構の解明のための基礎資料の収集が行われた。  
科技厅宇宙開発課、菊地技官、宇宙開発事業団、山本研究員、東海大学、杉森助教授 日米協力事業実施について打合せのため来所。
10. 19 昭和54年度おっとせい海上調査打合せ 東京 馬場技官 (～20)。
10. 22 アルゼンチン沖底魚資源調査結果の取りまとめ 東京 長崎、畑中両技官 (～24)。  
ミクロネシア漁業開発プロジェクト計画打ち合せ サイパン、パラオ、グァム 米盛技官 (～11.7) : 国際協力事業団の委嘱をうけて、パラオ地区のカツオ漁業の運営及び餌魚採捕と蓄養に関する



る現行の技術協力の評価と将来計画の検討を行った(～11.7)。

ICCAT 年次会議対策打ち合せ 東京 久米技官(～23)。

INPFC 第26回定例年次会議, 生物学調査常設小委員会 東京 佐野部長, 高木, 竹下, 伊藤(準)待鳥, 伊藤(外), 藤田, 加藤, 岡崎各技官(～27): サケ・マス分科会は, カナダ, J. McDONALD 外3名, 日本, 高木外8名, 合衆国, R. L. BURGNER 外4名が参加して, 議長佐野によって会合がもたれ, 溯河性サケ科魚類及び関連する海洋学に関する調査結果の検討が行われた。サケ・マスの大陸起源に関する研究において調査協力の水準をより一層推進するため, 1980年の漁期前に, 2月, 東京において調査計画の調整を行うサケ・マス調査調整特別会議を開催することなど, 幾つかの勧告がとりあげられた。タラバガニ及びズワイガニ分科会は, 日本, 竹下外4名, 合衆国, R. OTTO 外1名が参加して, 議長今村(水産庁)によって会合がもたれ, カニ類の資源状態に関する調査結果の検討が行われた。日本漁業の対象となる東部ベーリング海のズワイガニの資源評価は, 日米両国の見解に一致がみられなかった。調査漁具の採集効率の推定等についての日米共同調査は, 1980年も継続することが合意された。分科会の付託事項に, クリガニ科2属のカニの研究を加えることを勧告。

10. 24 養殖研玉城庁舎完成披露式 玉城町 福田所長。
10. 25 水研所長懇談会 長崎 福田所長(～26)。  
第26回全国水産高等学校実習船運営協会総会・研究協議会 宮古 宇都 技官(～26): 文部省, 水産庁, 日鯉連, 県教育庁, 水産高校の関係者200名出席, 昭和55年度の実習船運営方針等について協議。
10. 26 中国漁業指導員8名視察のため来所。  
パラオ政庁 Mr. CHAPMAN マグロ資源研究話合いのため来所。  
会計事務打ち合せ 東京 和田会計課長。
10. 27 捕鯨対策委員会科学部会 東京 福田所長 大隅, 和田両技官(～28): 31 IWC 科学小委員会の討議内容の検討及び反省が行なわれ, 次の年次会議までに予定されている特別会議の日程とその対策計画について討議した。
10. 29 水研所長会議 東京 福田所長(～30)。  
技会施設会議 筑波 増田, 鈴木両事務官(～

11.1)。

INPFC 第26回定例年次会議 東京 佐野部長, 高木, 岡崎各技官(～11.1): 西村健次郎議長のもとでの4回の本会議, 海産哺乳動物特別小委員会などの協議によって, 前の週に行われた生物調査小委員会で討議された調査結果, 調査計画及び出版の検討, サケ・マスに関する条約第3条1(d)の実施に対して要求される措置, 条約区域における溯河性魚種及び溯河性魚種を対象とする操業で漁獲される海産哺乳動物に関する条約第10条及び付属書1(c)の状況の検討等を審議。海産哺乳動物特別小委員会の科学分科会の次回会合を, 1980年2月, 東京で開催し, サケ・マス漁業によって混獲されるイシイルカ等に関する調査研究に関連した討議を行う。

NMFS (コジアク研究所), Dr. R. OTTO 来所: 東部ベーリング海カニ資源の調査方法及び資料取りまとめに関する意見交換(～11.2)。

10. 30 水産統計課会議 東京 長崎技官(～31): 日本近海における漁業資源管理と生産量, 特に, 統計業務と関連して講演をおこなった。
11. 1 ワシントン大学 FRI, Mr. C. K. HARRIS 来所: サケ・マス大陸起源の研究に関して, 標識放流調査及び鱗相研究について意見交換(～2)。  
リモートセンシング応用研究資料実地検索及び研究打ち合せ 東京 山中(郎)部長: 気象庁などにて GMS, TIROSS 等の衛星写真の検索, MTコピー製作, 画像処理方法等につき意見交換。  
県漁連講演会 秋田県男鹿 長崎技官(～4): 1980年代の日本の漁業について講演。
11. 2 極地研生物資源諮問委員会 東京 山中(郎)部長, 大隅, 奈須両技官(～3): 南極条約及び南極海洋生物資源保存条約についての進行状況(1980年2月ごろキャンベラで採択され科学委員会設置となる運び, ただし日・豪両国は未批准)の説明, 1980-81年の FIBEX に予定される調査海域, BIOMASS 計画により得られる資料の取扱い等についての報告及び協議, 永田所長より音響調査の場合の測器の較正標準化について意見があった。
11. 3 ICCAT 第6回定例年次会議及び第10回調査統計小委員会 マドリード 久米, 新宮両技官(～23): メバチに対してキハダと同様の3.2kg魚体制限案が, また, クロマグロについては現行規制の2ヶ年延長が採択された。
11. 5 INPFC 島執行委員長, C. R. FORRESTER,

E. FUNK 及び A. HAVSEN 研究打合せのため来所(～6)。

カー標本の運搬 三浦三崎 藤田技官。

日ソ漁業委員会の事前検討 東京 佐野部長：純技術的な問題からサケ・マスの資源評価は別途協議したいと日本側は提案していたが、11月12日から開催予定の日ソ漁業委員会第2回会議において極東サケ・マスを含めて漁業資源状態について評価することになったため、水産庁海洋漁業部長外とサケ・マス資源問題を事前協議。

11. 6 資源海洋部長懇談会及び部長会議 東京 山中(郎)、上柳、佐野各部長、池田企連室長(部長代理)(～7)：主要議題 (1)重要研究問題の整理、(2)昭和55年度資源海洋関連予算要求の概要、(3)200カイリ内漁業資源調査、(4)漁海況予報事業、(5)燃料費の高騰に伴う問題と対応(速力低下、期間の短縮等も含む)、(6)大陸棚斜面調査、(7)その他……(研究目標の再検討等を今後行いたい)等。

海洋測器専門委員会 東京 行縄技官：水路部にて委員会要綱案及び今後の運営に関して討議。

11. 7 庶務部課長会議 広島 西園部長、二村、和田両課長(～10)。

技会筑波計算センター 上野係長 計算機利用に関する打合せに来所。

11. 8 海洋水産資源開発センター黒岩道徳調査員第15竜昇丸によるアリューシャン水域及びアラスカ湾のギンダラ、マダラ調査終了報告のため来所。

東海水研 森住係長、坂上事務官 事務打合せのため来所(～9)。

リモートセンシング応用研究打合せ 東京 山中(郎)部長：リモートセンシングセンター、気象協会等にてGMS資料の画像カラー表示手法及び米国よりの資料入手の可能性等につき打合せ。

三崎遠洋漁業研究会 三崎 塩浜技官：題目「クロマグロ及びメバチ資源の最近の動向」について講演。

アルゼンチン沖魚類資源調査結果の検討会議 マルデルプラタ 畑中技官(～23)：浮魚及び底魚有用資源に関する過去1カ年間の協同調査の結果が日・ア間で最終的に合意され、協同報告書が作成された。

11. 9 照洋丸との調査打ち合せ 東京 久田、森田(二)両技官：後期はえなわ調査航海の実施細目の最終打合せ、用具、器材の整備確認。

日ソ漁業委員会第2回定例年次会議 モスクワ 佐野部長(～26)：当初、東京出発10日、開会式12日と予定されていたが、なぜかソ連側から査証発給がなく出発は14日まで延期。サケ・マス、スケトウダラ、マイワシなどの漁業資源の評価及び

漁業協力計画を検討するため、この委員会会議は、日本側森首席代表(前水産庁長官)外28名、ソ連側ザイツェフ首席代表(漁業省参与)外23名が参加し、15日から26日まで開催された。なおこれと併行して、双方の200海里水域内の漁獲割当量を決める漁業暫定協定に関する交渉が、20日から12月15日まで行われた。漁業資源小委員会で評価の対象となった極東サケ・マスについては、双方は次のとおり評価し見解は一致しなかった。日本側；1980年の北西太平洋へ来遊するサケ・マス資源の一般状態は、過去5年間の平均的水準及び1978年の水準と同程度のものとなる。ソ連側；ギンザケ、ベニザケ及びアナディル系を除くシロザケの系統群の総ては、いずれも不良な状態にある。カラフトマスは西カムチャッカ系のみ比較的良好であるが、他の系統群はいずれも減少するので、全体として数量低下は存続する。良好な状態にある魚種は、マスノスケのみである。

11. 11 チリ国 IFOP (漁業開発研究所)、Sr. F. INOSTROZA 研究打合せのため来所(～14)：マグロ漁場開発と海洋研究及び資源研究等に関して、所内及び焼津分室、静水試、東海大学等を訪問、各所員と意見交換。

11. 12 アクチバブル・トレーサーの応用研究 茨城県 東海村 伊藤(準)、加藤両技官(～17)：日本原子力研究所実験炉において中性子照射により、希土類元素投与のサケ及びマダイ試料の放射化分析。

バイオテレメトリー機器作製打合せ 横浜 吉田技官(～14)。

第17回 GSK シンポジウム(漁業資源の初期減耗をめぐる諸問題一卵から加入までの減耗機構について)、浮魚、底魚、環境各部会 広島 西川、竹下、永井、行縄各技官(～15)：初期減耗機構解明のための調査研究方法が討議された。

11. 13 直研連会議 東京 福田所長。

マイクロネシア漁業開発プロジェクト計画報告会 東京 米盛技官(～14)。

照洋丸調査航海に出港 ミクロネシア水域 久田、森田(二)両技官(12.26)。

魚市場マグロ漁獲物調査 東京 本間技官。

照洋丸の調査打合せ 東京 山中(一)、木川両技官：STDの精度及び使用方法につき討議。

11. 14 技会場所長会同 東京 福田所長(～15)。

昭和54年度情報活動研修会 筑波 池田企連室長(～15)：情報活動に関する諸講演と電算機による文献検索の実験に参加し、米国における官庁情報の先進性と特殊性、コミュニケーションと情報との関連および両者の構造、および各種情報媒体の単位空間当たりビット数などの研修を受けた。



11. 15 日本水産資源保護協会高芝理事 マグロ関係業務打合せのため来所。  
全国会計部会 伊豆稲取 渡辺事務官(～16)。
11. 16 リモートセンシング国際セミナー(経団連, 宇宙開発事業団, 科技厅共催)及び研究打合せ 東京 山中(郎)部長(～17): 米, 加, ブラジル, ESA(ヨーロッパ宇宙機関), フランス, イタリア等各国のリモートセンシングの技術及び応用についての発表及び討論があった。  
おとせい委託飼育にともなう輸送等の打合せ 沼津 三津シーパラダイス 長崎, 吉田両技官。
11. 19 昭和54年度おとせい海上調査 道南海域 馬場技官(～12.22): 分布域調査を主目的とした。  
アクチバブル・トレーサーの応用研究 茨城県東海村 加藤技官(～23): 日本原子力研究所においてマダイ試料の放射化分析。  
瀬戸内海生産力に関する調査 広島県大野 長崎技官(～21): 資源管理型漁業の資料収集のため, 瀬戸内海, 広島県におけるマダイ, ガザミ, クルマエビについての稚魚放流と回収に関する情報と問題点の聞き取り調査。  
技会整備課 小島課長補佐外1名 事務打合せのため来所。
11. 20 南西水研黒潮開発利用調査 南西海域 俊鷹丸(～12.10)。  
関東水産統計協議会 伊豆長岡 西園部長(～21)。
11. 21 鹿児島水試「おゝすみ」乗船 九州西岸沖 米盛技官(～12.7): 「おゝすみ」に乗船し, 対島, 五島, 枕崎沖に来遊するクロマグロ幼魚の来遊量調査と標識放流を実施した(30尾放流)。又, 主要水揚港においてクロマグロ幼魚の体長測定を行った。
11. 22 南東大西洋漁業国際委員会(ICSEAF)会議に関する事前打合せ 東京 佐藤技官(～23)。  
リモートセンシング応用研究打合せ 東京 山中(郎)部長: 房総海域で実施した航空機によるMSS資料の実地検討, 今後の研究の進め方等につき東海水研担当者と協議。  
水産海洋研究会 東京 池田企連室長: 漁業研究に関する国際協力をテーマとした研究座談会において, 日米加をめぐる問題で話題提供をした。
11. 23 東大海洋研共同利用研究 大槌臨海研究センター 和田技官(～12.23): 鯨類の集団構造を明らかにするために, 従来からの電気泳動法に改良を加え, より多くの酵素について多数処理が可能なシステムを確立した。これにより, 1人1日当り100サンプルについて10種余の酵素のスクリーニングが容易に行なえるようになった。
11. 26 ICSEAF 科学諮問委員会(SAC)及び本会議リスボン 佐藤技官(～12.18): 加盟各国からの最新の漁獲, 生物資料に基づいて, 主要魚種の資源評価が行われ, メルルーサ類については1980年のTAC及び国別漁獲割当量が決定された。今回はさらにマアジ類についても初めてTACが設定され, 1980年の漁獲はその枠内でオリンピック方式により行われることとなった。
11. 27 開洋丸高橋船長外4名 昭和54年度第3次南極海調査航海打合せのため来所。  
極地研究所星合教授 南極オキアミ調査打合せのため来所。  
韓国大使館 河水産官 マグロ関係業務打合せのため来所。
11. 29 サケ系群に関する研修会 石川県美川 岡崎技官: 日水研からの依頼に基づき, サケ別枠研究の一環として「酵素の多型によるサケ系群識別の原理と標本採取の実習」の研修会が水産試験場美川分場で行われ, 講師として出席。  
リモートセンシング推進会議国際分科会 東京 山中(郎)部長: 科技厅にて日米協同宇宙開発計画の今後の推進方策, 米国よりの資料の取扱い法等について協議。
11. 30 学術会議南極研究連絡会バイオマス小委員会 東京 山中(郎)部長, 奈須技官: 東大海洋研にて音響による資源推定ワークショップ(ポーランド, ホートン, 9月, 土井技官出席)の報告, その外今後の計画についての意見交換—音響による資源推定ワークショップ(5月, ハンブルグ), FIBEX 参加各船首席調査官会議(6月, パリ—), 資料統計ワークショップ(7月, ケンブリッジ)等の予定のあることが報告された。
12. 1 バイオテレメトリー機器作製打合せ並びにテスト 横浜 吉田技官(～2)。
12. 3 沿岸漁業実態調査 長崎県五島 長崎技官(～7): 資源管理型漁業の資料収集のため, 長崎県五島におけるマダイ等の稚魚放流と回収に関する情報と問題点の聞き取り調査。
12. 4 IWC/IDCR 南水洋ミンククジラ調査航海計画会議 東京 大隅技官(～6): 本調査のproject leaderであるBEST博士(南ア)を招待し, BROWNELL博士(米)の参加を得て, 日本側から研究, 行政, 外務, 業界の各担当者が出席して開かれた。日程, 調査海域, 船団操業との調整, 調査項目及び方法, 通信, 準備資材などの細部に亘る検討がなされ, 国際的合意を得ることができた。  
中国, 南海水産研究所佟广生副所長外7各当所訪問。

12. 5 サケ・マス研究記録映画の作成企画委員会 東京 高木技官：サケ別種研究の記録映画に関して全体構想の検討，年次別撮影計画等について協議。
12. 6 サケ別種研究「河川型放流」研究協議会 札幌 高木，加藤両技官（～7）：北水研主宰の研究協議会で，河川型放流技術を基盤とした稚魚減耗の抑制研究の経過，北海道のサケ・マス資源の動態と親魚の沿岸来遊，栽培漁業とサケ・マス増殖への期待，等の議題による討議。協議会のあと北海道さけ・ますふ化場関係者とサケ・マス調査研究に関して協議。  
所内談話会 人工衛星の漁業研究への応用 遠洋水研 山中(郎)部長発表，所員及び外来者約30名討論に参加。  
マグロ資源計算 筑波 本間技官（～7）。
12. 12 昭和54年度開洋丸第4次調査航海（南極オキアミ資源調査）東京出港 奈須技官（～55.3.10）：南緯60°以南，東経110°～130°の海域においてオキアミの採集と海洋観測を行ない，本資源の科学的解明をはかる。  
北東太平洋漁獲統計（1979年1月—10月）受け取り及び混獲問題検討会議 東京 池田企連室長，岡田，佐々木両技官（～14）。  
北大西洋漁業機構（NAFO）リスボン会議の打合せ 東京 長崎，畑中両技官（～13）。
12. 13 アクチバブル・トレーサーの応用研究 沼津 加藤技官：県栽培漁業センターにおいてマダイ標本採取。  
日魯漁業（株）鮭鱒事業部五味川氏外3名 サケ・マス調査資料転写等のため来所（～14）。
12. 14 日本さけ・ます資源研究調査会の研究懇談会ほか 東京 佐野部長：INPFC 年次会議並びに日ソ漁業委員会における評価議論を通じたサケ・マスの資源状態及び関連事項について，日鮭連役員，全鮭連役員，北洋母船協議会幹事等へ説明，協議。  
海洋環境生物研究所 開所式 御宿 福田所長（～15）。
12. 17 さけ・ます調査船連絡会議 東京 佐野部長，高木，伊藤(準)両技官：北洋研究協議会定例会議に引き続いて，14機関，28名の参集者によって標記の会合をもち，昭和54年度の調査船による調査の実施経過，昭和55年度の調査船による調査計画の大綱等を協議。
12. 18 アクチバブル・トレーサーの応用研究 茨城県 東海村 加藤技官（～22）：日本原子力研究所におけるマダイ試料の放射化分析。  
事務打合せ 東京 森事務官（～19）。
12. 20 業務打合せ 東京 西園部長（～21）。
12. 21 IOC 国内委員会 東京 山中(郎)部長：文部省にて，IOC 理事会及び総会の出席報告（東大海洋研，奈須，平野両教授など），WESTPACの今後のワークショップの準備等について協議。  
阿賀野川用水農業水利事業所樋口課長外2名 河川えん堤の魚道構造とサケの溯河習性との関係について調査のため来所。  
東海水研 水戸企画連絡室長 研究業務打合せのため来所。  
人事院給与法改正説明会 名古屋 森事務官。
12. 24 ICSEAF 会議報告会 東京 佐藤技官（～25）。
12. 26 照洋丸マイクロネシア水域調査より帰港 東京 久田，森田(二)両技官：マグロ，カジキ類の分布水層と海洋条件の関係についての新しい資料を得るために，3種類のまぐろはえなわ漁具を用いた漁獲試験と海洋観測を実施した。  
サケ・マス調査に関して打合わせほか 東京 佐野部長：INPFC サケ・マス調査調整特別会議等の準備打合わせ，ソ連提出の鱗標本の受領，あわせて連合情報社の故藤田巖氏追悼資源研究者座談会へ出席。  
照洋丸調査資料等の受け取り及び55年度前期航海計画打合せ 東京 山中(一)，木川両技官：クロマグロの主産卵期を対象とした卵稚仔調査及び海洋調査計画の概要について打合せを行った。

## 刊行物ニュース

- 山中一郎……………リモートセンシングの水産海洋研究への応用についての展望 昭和53年度漁業資源研究会議 環境部会報（43～56）1979年6月。
- 大隅清治……………鯨資源の利用と捕鯨モラトリアム 水産科学24（2）1979年10月。
- 山中一郎……………赤道以南西部インド洋の漁業資源に関する FAO/IOP ワークショップ報告書 海洋水産資源開発センター資料 No.15（1～53）1979年10月。（翻訳 J.A. GULLAND: Report of the



FAO/IOP Workshop on the Fishery Resources of the Western Indian Ocean South of the Equator, IOFC/DEV/78/45, FAO, 1979.)

- 山中一郎……………リモートセンシング—水産業分野への応用について 宇宙 No.13 (リモートセンシング特集) (78~91) 1979年11月。  
山中一郎……………リモートセンシング—水産業分野への応用 工業技術 Vol. 20, No. 12 (リモートセンシング特集) (36~40) 1979年12月。  
山中一郎……………シンポジウム 漁海況予報の現状と問題点 6. 諸外国における漁海況予報と今後のあり方 水産海洋研究会報 第35号 (93~96) 1979年12月

---

第26回 INPFC 年次会議提出文書 1979年9月

(底魚関係)

- 佐々木喬……………ベーリング海および北東太平洋における日本のギンダラ標識放流実験結果 (Doc. 2167)  
池田郁夫……………ギンダラ資源の水域別漁獲許容量とわが国延縄漁業の performance について (Doc. 2168)  
池田郁夫……………東部ベーリング斜面およびアリューシャンにおけるメヌケ類のバイオマスについて (Doc. 2169)  
岡田啓介・山口閻常・佐々木喬・若林 清……………ベーリング海及び北東太平洋における底魚資源の動向について (Doc. 2170)  
岡田啓介……………ベーリング海における日本底魚漁業の概況 (Doc. 2171)  
岡田啓介……………北東太平洋における日本底魚漁業の概況 (Doc. 2172)  
岡田啓介編……………ベーリング海および北東太平洋における日本底魚漁業資源調査に関する 1979 年の実施状況と 1980年の調査計画 (Doc. 2173)  
池田郁夫……………交互追尾操業 (ATA) によるトロール網の vulnerability の推定 (Doc. 2174)  
IKEDA, I.……………Release-recovery-data analysis for estimating the rate of emigration and mixture of fish stocks (Doc. 2175)  
岡田啓介……………アリューシャン海盆に生息するスケトウダラの生物学的特性及び魚群分布について (Doc. 2176)  
佐々木喬編……………北洋底魚標識放流及び再捕記録 (Doc. 2242)  
佐々木喬……………アリューシャン水域およびアラスカ湾におけるギンダラ・マダラ資源調査中間報告 (Doc. 2226)  
山口閻常・若林 清……………1979年第35昌徳丸・第21薬師丸による日米協同北洋底魚生物調査中間報告 (Doc. 2228)  
岡田啓介……………魚群探知機と中層トロールによるアリューシャン海盆のスケトウダラ現存量の推定 (Doc. 2204)  
IKEDA, I.……………Postscript on ATA trawl experiment (Doc. 2243)

---

1979年 ICCAT 年次会議 SCRS 提出文書 1979年11月

- KIKAWA, S. and Y. NISHIKAWA……………Distribution of larvae of yellowfin tuna and skipjack in the Atlantic Ocean. (SCRS/79/49)  
SHIOHAMA, T.……………Estimation of overall fishing intensity of Atlantic longline albacore, 1956-77. (SCRS/79/53)  
HONMA, M.……………Overall fishing intensity, catch, catch by size and spawning indices of yellowfin tuna in the Atlantic tuna longline fishery, 1956-77. (SCRS/79/54)  
SHINGU, C. and K. HISADA……………Analysis on the Atlantic bluefin tuna stock. (SCRS/79/58)  
SUZUKI, Z.……………An aspect on catch of three major species, skipjack, yellowfin and bigeye tunas, taken by the Japanese baitboat fleet based in Tema, 1969-78. (SCRS/79/61)  
KUME, S.……………Overall fishing intensity of Atlantic longline fishery for bigeye tuna, 1956-77. (SCRS/79/62)  
KUME, S.……………Japanese tuna fishery and research in the Atlantic, 1978-79. (SCRS/79/102)  
KUME, S.……………A production model approach to evaluate recent bigeye stock condition in the Atlantic. (SCRS/79/63)  
KIKAWA, S. and M. HONMA……………Recent trends in catch, effort and size for white and blue marlins based on data from the Japanese Atlantic fishery. (SCRS/79/64)

KUME, S. .... Currently logged catch and CPUE of Japanese baitboat fishery based at Tema, up to August 1979. (SCRS/79/116)

ICSEAF 年次会議提出文書 1979年12月

SATO, T. .... Japanese Research Report for 1978. (ICSEAF SAC/79/S.P./34)

KAWAHARA, S. and T. NAGAI .... On the mixture of three species of *Merluccius* in the ICSEAF Area. (ICSEAF SAC/79/S.P/35)

SATO, T. .... Reassessment of panga, *Pterogymnus laniarius*, stock in the ICSEAF Subarea 2. (ICSEAF SAC/79/S.P./41)

人事のうごき

(遠洋水研俊鷹丸三等航海士)

技 永井信之

- 10. 1 命 日水研みずほ丸一等航海士に配置換  
(遠洋水研俊鷹丸一等航海士)  
技 広橋昇保
- 10. 1 命 遠洋水研俊鷹丸一等航海士に配置換  
(遠洋水研俊鷹丸二等航海士)  
技 原田洋介
- 10. 1 命 遠洋水研俊鷹丸二等航海士に配置換

- 10. 1 命 遠洋水研俊鷹丸三等航海士に配置換  
(水産庁船舶予備員) 技 榎木園正一
- 11. 1 命 東海水研企画連絡室長  
(遠洋水研企画連絡室長) 技 水戸 敏
- 11. 1 命 遠洋水研企画連絡室長  
(遠洋水研底魚海獣資源部長)  
技 池田郁夫
- 11. 5 命 遠洋水研俊鷹丸司厨手に配置換  
(遠洋水研俊鷹丸操舵手) 技 佐藤教雄

それでも地球は動いている

(編集後記)

唐の詩人白楽天の弟は小説における夢のあり様を、(1) 夢を見た本人Aがその夢から抜け出して、現実の人間であるBと共有する行動をする、(2) Aの夢はBの行為などと符合していた、及び(3) AとBとが共通の夢をみる、の3つに分類した。この場合AとBの経験や証言はいずれも真実であると第三者によって確認されていることは勿論である。

一定の目的をもつとはいうものの、未だ実現されていない事象を扱うという点では、予報とか目標設定なども夢と異なるところはない。したがって、`1年の計、とか`1980年代……の予測、といった新年記事はその時点では夢を述べたにすぎず、内容の真偽をとやかく詮索する筋合のものではないだろう。

しかし、夢を現実化するという目的をもつ予報や目標設定にあたっては、制約条件あるいは`場、について相当の神経を払う必要がある。新年に際して外国の1新聞は、その第1面を白紙のままとして1980年代の予測の困難さを強調したといわれる。わが水研内でも研究の段階目標の更新作業が始まろうとしているが、この場合は白紙では冗談が強すぎよう。

今回の段階目標の一応の目安は、今後5乃至10年間に達成すべき研究問題を洗い出すこととされているが、問題解決に当る研究者の勢力は、例えば資源関係では、昭和60年から10年間で激減し、現勢力の1/2に低下すると

の資源計算がある。この計算が真ならば、10年さきの到達点をセットすることは、その実効性を失うことにもなりかねず、段階目標設定の意義も薄れよう。

最近の決り文句ではないが、200海里体制下における水産研究の重要性は各方面から注目の的とされており、段階目標の設定においても、かなり高度な到達目標が掲げられる公算が大きい。

明年度の水研関係予算は、全体的な緊縮財政にも拘らず、相当な増加が予定されているが、これは水産研究の重要性が社会的に認識されつつあることの間接的表われであり喜ばしいことに違いない。しかし、研究を進展させる契機として二者択一的に研究者と研究費の選定を迫られた場合に研究者の重要性を指摘することが一般的と考えられることから、人員の確保に今一段の努力が要求されてよいように思われる。

白行簡の第1類型の夢は、特にこの型の物語りが少ない現代では、大変ユニークなもののように思われる。研究の成果が実社会に有効に作用する例は従来からも多かったが、必ずしも充分とはいえない。また段階目標が研究の実践に適用され、効果をあげた例は決して多くはない。そして、夢が現実と共有行動をとれるのは夢をみた人の努力にのみ係るのであろう。(池田記)

昭和55年1月20日発行

編集 企画連絡室  
発行 水産庁遠洋水産研究所  
〒424 静岡県清水市折戸1000  
電話 <0543>34-0715